訓讀説文解字注（十）

森　賀　一　惠

富山大学人文学部紀要第 76 号抜刷
２０２２年２月

訓讀説文解字注（十）

森　賀　一　惠

「訓讀説文解字注（九）」に續いて，段玉裁『説文解字注』を訓讀し注を附す。

凡例

『訓讀説文解字注』金冊～匏冊に倣う。説解原文に（一）（二）（三）等の漢數字の番號を附したのは，段注の入るべき箇所を示したもので，説解原文，段注に 1）2）3）等のアラビア數字の番號を附したのは，訓讀者注の被注箇所を示したものである。十三篇上は『繫傳』では缺けている卷二十五に當るが，祁刻本の異同については記す。

十三篇上

（糸部）

1a

，細絲也（一），象束絲之形（二），凡糸之屬皆从糸，讀若覛（三），，古文糸，

糸，細き絲也，絲を束ぬるの形に象る，凡そ糸の屬は皆な糸に从ふ，讀みて覛（ベキ）の若くす，糹，古文の糸，

（一）「絲」なる者は「蠶吐く所也」[1]。「細」なる者は「微也」[2]。「細き絲」を「糸」と曰ふ。「糸（ベキ）」の言は蔑（ベツ）也。蔑の言は無（ブ）也。

（二）此れ古文を謂ふ也。古文は下に見ゆ。小篆「 」に作るは則ち增益有り。

（三）莫狄の切，十六部。

，蠶衣也（一），从糸，从虫，从芇（二）， ，古文繭，从糸見（三），

繭，蠶衣也，糸に从ひ，虫に从ひ，芇に从ふ，絸，古文の繭，糸見に从ふ

（校）「从芇」，大徐「黹省」に作り，祁刻本「 省」に作る。

（一）「衣」なる者は「依也」[3]。蠶依る所を「蠶衣」と曰ふ。蠶自らは其の衣を有せず，而して

1）十三篇上 (40a) 絲部「絲」説解。

2）十三篇上 (7a) 糸部「細」説解。段注本は「微」を「敚」に作る。二篇下 (15a) 彳部「微，隱行也」，八篇上 (19a) 人部「敚，眇也」(但し，二徐は「眇」を「妙」に作る)。

3）八篇上 (48b) 衣部「衣」説解。

其の衣を以て天下に衣す。此れ聖人の取る所の法也。

(二) 帀の聲。各本「黹[4]の省」に作る。「黹」,「蔽」と爲すを得ず。會意。『韵會』「㒼[5]の省聲」[6],「㒼」上, 二十幷(あは)するに从ふ, 亦た非也。『五經文字』に曰く「虫に从ひ, 帀に从ふ, 帀は音綿」[7]と。許書𡿨部に帀字有り,「相ひ當る也, 讀みて宀(ベン)の若くす」と。[8]張參據る所の本是なり。今據りて正す。「虫」なる者は蠶也。「帀」なる者は僅かに其の身を蔽ふに足る也。工殄の反, 十四部。

（三）見の聲也

繅，繹繭爲絲也，从糸巢聲（一），

繅，繭を繹きて絲と爲す也，糸に从ふ，巢の聲，

（一）穌遭の切，二部。俗に「繰」に作る。乃ち「帛の紺の如き色」[9]の字。

繹，擂絲也（一），从糸睪聲（二），

繹，絲を擂く也，糸に从ふ，睪の聲，

(校)「擂」，大徐「抽」に作る。

（一）「擂」なる者は「引く也」。[10]引申して凡そ駱驛、温尋の稱と爲す。駉の傳に曰く「繹繹は善く走る也」と。[11]

（二）羊益の切，古音は五部に在り。[12]

1b

緖，絲耑也（一），从糸者聲（二），

緖，絲の耑也，糸に从ふ，者の聲，

4）七篇下 (58b) 黹部「黹，箴縷所紩衣也」。

5）七篇下 (39b) 网部「㒼，平也，从廿，五行之數，二十分爲一辰，从㒳，……，讀若蠻」。「从廿」段注に「二十併也」,「讀若蠻」段注に「母官切，十四部」。

6）上十六銑・繭（吉典切）。

7）糸部。

8）四篇上 (31b) 𡿨部「帀, 相當也, 闕, 讀若宀」,「闕」段注に「以繭从帀聲求之, 則三直均長」といい,「帀」段注では段注本「繭」の説解に基づいて「帀」の字形を説いている。また,「讀若宀」段注に「母官切。古音蓋在十二部」。「母官切」（魂韻）は今韵古分十七部表では十三部。

9）十三篇上 (17a) 糸部「繰」の説解。段注に「禮記用爲澡治字，他書用爲繅絲字」。

10）十二篇 (44a) 手部「擂，引也，从手畱聲，抽，擂或从由，拸，擂或从秀」。

11）魯頌。「以車繹繹」傳。

12）今韵古分十七部表では「羊益切」(昔韻) は十六部。古十七部諧聲表では睪聲は五部。『六書音均表』一・弟五部弟十六部入聲分用說に「弟五部入聲與弟十六部入聲，周秦漢人分用，晉宋而下多以弟五部入聲之字韵入於弟十六部」。

（一）「耑」なる者は，「艸木初めて生ずるの題也」[13]。因りて凡そ首の稱と爲す。絲を抽く者は緒を得て而して引く可し。之を引申すれば、凡そ事皆な緒の纘ぐべき有り。
（二）徐呂の切，五部。

，敚絲也（一），从糸面聲（二），
緬，敚（ほそ）き絲也，糸に从ふ，面の聲，
（校）「敚」，大徐「微」に作る。
（一）「敚」各本「微」に作る。今正す。[14]「緬」の引申は凡そ緜邈の稱と爲す。『穀梁』莊三年傳に曰く，「改葬の禮は緦，下を舉ぐれば緬（とほ）き也」[15]と。
（二）弭沇の切，十四部。

，絲也（一），从糸屯聲（二），論語曰，今也純，儉（三），
純，絲也，糸に从ふ，屯の聲，論語に曰く，今や純は儉と，
（一）『論語』「麻冕は禮也，今や純」，孔安國曰く「純は絲也」と。[16]此れ「純」の本義也。故に其の字 糸に从ふ。按ずるに「純（シュン）」は「䤕（シュン）」と音同じ。「醇」なる者は「澆（うす）めざる酒也」[17]。「純」を叚りて「醇」字と爲す。故に班固曰く「變（か）へざるを醇と曰ひ，襍（まじ）へざるを粹と曰ふ」と。[18]崔覲『易』を説きて曰く「襍へざるを純と曰ひ，變へざるを粹と曰ふ」と。[19]其の意は一也。美絲、美酒，其の襍へざるは同じき也。襍へざれば則ち壹なり，壹なれば則ち大なり，故に釋詁[20]、毛傳[21]、鄭箋[22]皆な「純は大也」と曰ふ。文王「純も亦た已まず」[23]は，卽ち『周易』の「純

13） 七篇下 (3a) 耑部「耑，物初生之題也，上象生形，下象根也」。二徐、段注本いずれも「艸木」を「物」に作る。
14） 注 2) に引く二篇下 (15a) 彳部「微」および八篇上 (19a) 人部「敚」の説解參照。
15） 釋文に「緬，亡善反，遠也」。
16） 子罕篇「子曰，麻冕禮也，今也純儉，吾從衆」集解「孔曰，……，純，絲也，絲易成，故從儉」。
17） 十四篇下 (35a) 酉部「䤕（醇）」説解。
18）『文選』卷 6・魏都賦「非醇粹之方壯」劉注引く班固注。
19）『周易』文言傳「大哉乾乎，剛健中正，純粹精也」集解引く。
20） 釋詁上。
21） 周頌・維天之命「文王之德之純」傳。
22） 小雅・賓之初筵「錫爾純嘏」箋，大雅・卷阿「純嘏爾常矣」箋，周頌・載見「俾緝熙于純嘏」箋，酌「時純熙矣」箋，魯頌・閟宮「天錫公純嘏宇」箋。
23）『禮記』中庸「文王之所以為文也，純亦不已」。

粹」也。[24]『詩』の「純束」は「讀みて屯の如くす」。[25]『國語』の「稛」[26]、『左傳』の「麇」[27]，皆な其の字也。『禮』の「純」，釋して「縁」[28]と爲す。[29]實は卽ち「縁」の音近叚借也。

（二）常倫の切，十三部。

（三）子罕篇の文。

，生絲也（一），从糸肖聲（二），

綃，生絲也，糸に从ふ，肖の聲，

（一）『韵會』「生絲の繒也」に作る。[30]今按ずるに繒名を言ふは則ち其の次に非ず。鄭君に依れば則ち實は繒の名。[31]當に「生絲也，一に曰く，繒の名」と云ふべし。「生絲」は未だ湅(ね)らざるの絲也。已に湅るの繒は「練」[32]と曰ひ，未だ湅らざるの絲は「綃」と曰ふ。生絲の繒を以て衣を爲れば則ち「綃衣」と曰ふ。古經多く「宵」[33]に作り「繡」[34]に作る。特牲禮に「主婦纚、笄、宵衣す」，注に曰く「宵衣は之を染むるに黒を以てし，其の繒は本と名づけて綃と曰ふ。詩に

24）文言傳。注 19) 參照。

25）召南･野有死麕「白茅純束」傳「純束猶包之也」箋「純讀如屯」釋文「純束，徒本反，沈云，鄭徒尊反」「如屯，舊徒本反，沈徒尊反，云，屯，聚也」。

26）齊語「諸侯之使垂橐而入，稛載而歸」注「稛，絭也」，晉語二「故輕致諸侯而重遣之」注「輕謂垂橐而入，重謂稛載而歸」補音「注謂稛，丘吻反」。七篇上 (48a) 禾部「稛，絭束也」段注に「絭束謂以繩束之，國語，……，古亦叚麇爲之，如左傳……，是也」，また「从禾囷聲」段注に「苦本切，十三部，按本从囷聲，丘吻反，轉入𪋻韵，爲苦本切，非从囷聲也」。

27）哀公二年傳に「羅無勇麇之」注に「麇，束縛也」，また八年傳に「及潞，麇之以入」注に「麇亦束縛」。阮元本は「麇」に作る。段注はここでは「麇」に作るが，阮元校勘記に「段玉裁案，廣韻十八吻，麇，邱粉切，引左傳無勇麇之，束縛也，葢傳本作麇字，所謂本無其字，依聲託事也，麇則後人所製俗字，十七準又有麇字，邱引切，則更俗矣」とあり，『廣韻』引く左傳は「麇」に作るが，「麇」は『説文』には無いことから，段玉裁も「後人製る所の俗字」としている。因みに「稛」字段注は『左傳』を引いて「麇」に作る。上注參照。十篇上 (22a) 鹿部「麇，麞也，从鹿，囷省聲，麕，籒文不省」，段注に「葢小篆省囷爲禾也，居筠切，古音在十三部」。

28）十三篇上 (23b) 糸部「縁，衣純也，从糸彖聲」。「衣純也」段注に「此以古釋今也，古者曰衣純，見經典，今曰衣縁，縁其本字，純其叚借字也」，「从糸彖聲」段注に「以絹切，十四部」。

29）『儀禮』士冠禮「青絇繶純」、鄉飲酒禮記「蒲筵緇布純」、鄉射禮記「蒲筵緇布純」、公食大夫禮記「緇布純」鄭玄注。『周禮』春官･司几筵「設莞筵紛純」鄭玄注引く鄭司農注。『禮記』曲禮上「冠衣不純素」鄭注。また，『禮記』深衣「純袂，縁，純邊」鄭注に「純謂縁之也」。

30）下平二蕭・宵（思邀切）小韻「綃，説文，生絲繒，从系肖聲，一曰綺屬，……」。原文「也」字無し。

31）『禮記』郊特牲「繡黼丹朱中衣」注「繡讀為綃，綃，繒名也」。

32）十三篇上 (11b) 糸部「練，湅繒也」。

33）七篇下 (11a) 宀部「宵，夜也」。「肖聲」段注に「相邀切，二部」。

34）十三篇上 (12b) 糸部「繡，五采備也」。「从糸肅聲」段注に「息救切，三部」。

『素衣朱綃』[35] 有り，記に『玄の綃衣』[36] 有り。凡そ婦人の祭を助くる者は服を同じうする也」[37] と。少牢禮注に曰く「大夫の妻尊し，亦た綃衣を衣(き)而して其の袂を侈くす」[38] と。玉藻に曰く「君子 狐の青裘に豹の褎，玄の綃衣以て之を裼す」，注に曰く「綃は綺の屬也」[39] と。郊特牲「繡黼丹朱の中衣」注に「繡は讀みて綃と爲す，綃は繒の名也」と曰ひ，『詩』を引きて「素衣朱綃」と。[40] 此の數條を合すれば「宵」、「繡」皆な叚借字なるを知る。此の生絲を以て繒を織るを「綃」と曰ふ。絲に從ふに仍りて名を得る也。故に或いは「繒の名」と云ひ，或いは「綺の屬」と云ふ。「綺」は卽ち「文繒(あやぎぬ)也」[41]。

（二）相幺の切，二部。

2a

，大絲也，从糸皆聲（一），

⿰糸皆，大(ふと)き絲也，糸に从ふ，皆の聲，

（一）口皆の切，十五部。

，絲曼延也（一），从糸巟聲（二），

⿰糸巟，絲曼延する也，糸に从ふ，巟聲

（一）「曼延」は疊韵字。「曼(マン)は引也」[42]。「延(セイ)は行也」[43]。「⿰糸巟(クヮウ)」の言は网(バウ)也。巾部に「㡃」[44] 有り。「㡃氏絲を涷る」[45]。「㡃」「⿰糸巟」古へは蓋し一字なり。

35）唐風・揚之水。阮元本は「綃」を「繡」に作る。傳「繡，黼也」。「素衣朱襮」傳は『禮記』郊特牲「諸侯繡黼丹朱中衣」を引き，箋に「繡當為綃，綃黼丹朱中衣，中衣以綃黼為領，丹朱為純也」釋文に「繡，音秀，衆家申毛並依字，下文同，鄭改爲宵」。

36）『禮記』玉藻。段注下文參照。

37）『儀禮』特牲饋食禮。阮元本鄭注は「宵，綺屬也，此衣染之以黑，其繒本名曰宵，詩有素衣朱宵，記有玄宵衣，凡婦人助祭者同服也」のように，「綃」を「宵」に作る。疏に「云其繒本名宵者，此字據形聲為綃，從絲省聲，但詩及禮記、儀禮皆作宵字，故鄭云，其繒本名曰宵，故引詩及禮記為證，引詩者直取字為證，引記謂禮記玉藻，非直取證字為宵，亦以證婦人宵衣為玄也」。

38）『儀禮』少牢饋食禮「主婦被錫，衣移袂」注。阮元本鄭注「袂」下に「耳」字有り。

39）注下文「染之以玄，於狐青裘相宜，狐青裘蓋玄衣之裘」。

40） 釋文に「繡，依注作宵，音消，注或作綃，亦同」。

41）十三篇上 (10b) 糸部「綺」の說解。

42）三篇下 (18a) 又部。「無販切，十四部」。

43）二篇下 (17b) 廴部。「諸盈切，十一部」。この訓は「延(エン)」でなく「延(セイ)」であると示すようだが，「今音以然切，則十四部」の二篇下 (17b) 延部「延，長行也」の方が「曼」と疊韵になる。

44）七篇下 (46a)。「㡃，設色之工，治絲練者，从巾巟聲，一曰，㡃，隔也，讀若荒」。段注「呼光切，十部」。

45）『周禮』考工記。阮元本は「㡃」を「⿰巾荒」に作る。阮元校勘記に「五經文字作㡃，云見周禮，按說文巾部云，㡃，設色之工，治絲練者，从巾巟聲」。

（二）呼光の切，十部。按ずるに當に讀みて苀（バウ）の如くすべし。[46]

紇，絲下也（一），从糸气聲（二），春秋傳有臧孫紇，

紇，絲の下（げ）也，糸に从ふ，气の聲，春秋の傳に臧孫紇有り[47]，

（一）絲の下る者を謂ふ也。

（二）下没の切，十五部。

紙，絲滓也（一），从糸氏聲（二），

紙，絲の滓也，糸に从ふ，氏の聲，

（一）「滓」なる者は「澱也」[48]。因りて以て凡そ物の渣滓（サシ）の稱と爲す。

（二）都兮の切，十五部。按ずるに此の篆「紙」と別なり。氏聲は十六部に在り。[49]

絓，繭滓絓頭也（一），从糸圭聲（二），一曰目囊絮湅也（三），

絓，繭の滓の絓頭也，糸に从ふ，圭の聲，一に曰く，囊を目て絮湅する也，

（校）「湅」，大徐「練」に作る。「从糸圭聲」，大徐「練也」の下に在り。

（一）繅る時 繭絲 結を成し，絓礙する所有るを謂ふ。工女蠶功畢りて後，別に之を理めて用と爲す也。引申して挂礙の稱と爲す。按ずるに『集韵』[50]、『類篇』[51]皆な「繭の滓也，一に曰く，絓頭」に作る。此れ古本也。「一に曰く，絓頭」なる者は，一名絓頭也。

（二）胡卦の切，十六部。

（三）別の一義。囊を以て絲緜を其中に盛り水に於いて之を湅るを謂ふ也。「湅」各本「練」に

46）『周禮』考工記「設色之工，畫、繢、鍾、筐、巾、㡃」（阮元校勘記「按依說文，㡃當作㡃，从巾㡃聲」）注に「鄭司農云，……，㡃讀為芒芒禹迹之芒」。『周禮漢讀考』巻6に「此讀爲當作讀如，其音同耳，説文巾部，㡃，……，案治絲謂湅絲，治練謂湅帛」。

47）阮元本は「紇」を「紇」に作る。襄公二十三年經に「冬十月乙亥，臧孫紇出奔邾」（三傳中『公羊傳』は「邾」下に「婁」字有り），『左傳』では襄公二十三年傳のほか，襄公十一年傳、昭公七年傳に見える。

48）十一篇上二 (33b) 水部「滓」の説解。また，十一篇上二 (33a) 水部に「澱，滓垽也」，十三篇下 (36a) 土部に「垽，澱也」。

49）氏聲は十五部。古十七部諧聲表では「氏聲」下に「與十六部氏別」とある。十三篇上 (33a) 糸部に「紙，絮一箔也」。但し，大徐本は「箔」を「笘」に作る。

50）去十五卦・畫（胡卦切）小韻「絓，説文繭滓也，一曰絓頭，一曰以囊絮練也」。上海圖書館藏述古堂影宋鈔本（上海古籍影印）、北京圖書館藏宋本（中華書局影印）同じ。四部備要本「滓」を「澤」に作る。

51）十三上糸部「絓，古賣切，……，又空媧切，……，又公懐切，又胡卦切，説文繭滓也，一曰絓頭，一曰以囊絮練也，又空媧切，又公懷切，文一重音五」。

作る。今正す。絮を湅るは『莊子』謂ふ所の「絖を洴澼す」[52]，『史記』謂ふ所の「漂」[53]，攷工記注謂ふ所の「湖漂絮」[54]，水部「瀫」下に云ふ「水中に於いて絮を擊つ」[55]，是れ也。

2b

，絲の色也（一），从糸樂聲（二），

纅，絲色也，糸に从ふ，樂の聲，

（一）絲の色の光采 灼然たるを謂ふ也。考工記に曰く「絲は沈ならんことを欲す」，注に云く「水中に在る時の色の如し」と。[56]今人之を漂亮と謂ふ。

（二）以灼の切，二部。

，箸絲於筟車也（一），从糸崔聲（二），

繀，絲を筟車に箸くる也，糸に从ふ，崔の聲，

（一）竹部に曰く「筟は筳也」[57]，「筳は絲を繀筦也」[58]と。筟車亦た繀車と曰ふ。『方言』に曰く「繀車，趙魏の閒は之を轣轆と謂ふ。東齊海岱の閒は之を道軌と謂ふ」[59]と。絲を筳に箸くるは之を繀と謂ふ。

（二）穌對の切，十五部。

，織從絲也（一），从糸巠聲（二），

經，從絲（たていと）を織る也，糸に从ふ，巠の聲，

（校）「從絲」，大徐無し。

（一）「從絲」二字，『太平御覽』卷八百二十六[60]に依りて補ふ。古へ横直を謂ひて「衡從」と爲す。

52）逍遥遊「宋人有善為不龜手之藥者，世世以洴澼絖為事」，郭注に「其藥能令手不拘拆，故常漂絮於水中也」釋文「絖，音曠，小爾雅云，絮細者謂之絖，李云，洴澼絖者，漂絮於水上，絖，絮也」。

53）淮陰侯列傳「諸母漂」集解「韋昭曰，以水擊絮為漂」。

54）弓人「於挺臂中有柎焉，故剽」注に「鄭司農云，剽讀為湖漂絮之漂」。『周禮漢讀考』卷 6 に「此讀爲葢當作讀如，擬其音也」といい，この注と同じく『莊子』、『説文』「瀫」の説解、『史記』を引き「湖漂絮者湖中漂絮，時有此語」とする。

55）十一篇上二 (38b) 水部「瀫」の説解。

56）弓人。

57）五篇上 (6b)。段注は「筳、筦、筟三名一物也」といい『方言』を引く。

58）五篇上 (6a)。段注は「繀」の説解を引き，「按絡絲者必以絲耑箸於筳，今江浙尙呼筳」という。『説文』「筳」篆下「筟」篆上に「筦，筟也」

59）『方言』卷 5。今本は「轣轆」下に「車」字有り。

60）資産部六・織「説文曰，織，作帛緫名也，經，織從絲也，緯，織横絲也，……」。

『毛詩』に云ふ「其の畝を衡從にす」[61]は是れ也。字本と「縱」に作らず。後人妄りに以て之に代ふ。[62]其音を分別して慈容、足容の同じからざる有り。[63]『韓詩』「其の畝を橫由にす」に作り，其の說に曰く「東西に耕すを橫と曰ひ，南北に耕すを由と曰ふ」と。[64]「由」は卽ち「從」也。何ぞ必ずしも讀みて「蹤」の如くせんや。[65]織の從絲は之を經と謂ふ。必ず先に經有り而る後に緯有り。是の故に三綱五常六藝は之を天地の常經と謂ふ。『大戴禮』に曰く「南北は經と曰ひ，東西は緯と曰ふ」と。[66]抑そも許「絞は縊也」[67]「縊は經也」[68]と云ふ。縊死何ぞ經死と言ふや。繩を以て直（たて）に縣けて死するを謂ふ。從絲の義の引申也。平者、立者皆な之を從と謂ふを得。[69]按ずるに獨り「從絲」を言ふ者は，上文專ら帛を言ふを蒙けて以て布の從縷有るは同じなるを謂ふ也。

（二）九丁の切，十一部。

3a

織，作布帛之總名也（一），从糸戠聲（二），

織，布帛を作るの總名也，糸に从ふ，戠の聲，

（一）「布」なる者は麻縷成す所，「帛」なる者は絲成す所，之を作るは皆な之を「織」と謂ふ。

61）齊風･南山。釋文に「衡，音橫，注同，亦作橫字，又一音如字，衡即訓爲橫，韓詩云，東西耕曰橫」「從，足容反，注同，韓詩作由，云，南北耕曰由」。

62）八篇上 (42a) 从部「從，隨行也」段注に「釋詁曰，從，自也，其引伸之義也，又引伸訓順，……，引伸爲主從，爲從橫，爲操從，亦假縱爲之」，また「慈用切，九部，按大徐以去韵別於平韵，非也，當疾容切」。十三篇上 (6b) に「縱，緩也，一曰捨也」。但し，大徐本は「捨」を「舍」に作る。

63）「足容反」（精母鍾韻）は齊風･南山の釋文に見え，「慈容」切（從母）は，段玉裁が「從」字注で「從」字の音だと主張する「疾容切」と同音。因みに，「從」は『廣韻』では上平三鍾･從（疾容切）小韻、樅（七恭切）小韻、去三用･從（疾用切）小韻に見え，釋文の「足容反」と同音の「卽容切」は上平三鍾･從（疾容切）小韻の「從」下に又切の一つとして見えるのみである．

64）齊風・南山釋文引く。注 61) 參照。

65）十四篇上 (54a) 車部「蹤」は「卽容切，九部」なので，齊風･南山の釋文の「足容反」に對する批判か。

66）巻 13 易本命「凡地東西為緯，南北為經」。

67）十篇下 (10a) 交部。

68）十三篇上 (38b) 糸部。段注本は「經」を「絞」に作り，「絞各本作經，庸人所改也，今正，交部曰，絞，縊也，與此爲轉注」という。

69）平面でも立体でも從（たて）といえるということか。

許の此の部は布を絲より別つ。「緝」篆[70]自り「絣」篆[71]に至る二十六字[72]は皆な布を言ふ也。而して分つべからざる者有り。「織」篆の如きは是れ也。經と緯と相ひ成るを「織」と曰ふ。古へ叚りて「識」字と爲す。『詩』の「織文」の「徽識」[73]の如き也。

（二）之弋の切，一部。

⿰糸式，樂浪挈令，織，从糸从式（一），

⿰糸式，樂浪の挈令，織は，糸に从ひ式に从ふ，

（一）「樂浪」は漢の幽州の郡名也。[74]「挈令」なる者は，漢張湯傳に「廷尉の挈令」有り，韋昭曰く「板に在りて挈む也」と。[75]『後書』應劭傳「廷尉の板令」に作る。『史記』又た「絜令」に作る。[76]漢燕王旦傳又た「光祿挈令」有り。[77]「挈」[78]は當に「栔」に作るべし。「栔は刻む也」[79]。樂浪郡 板に栔むの令也。其の「織」字此くの如し。之を錄する者は，字 六書の法に合へば則ち用ふべからざる無きを明きらかにする也。漢令の「鬲」「歷」に作るを錄する[80]が如し。

紝，機縷也（一），从糸壬聲（二），絍，紝或从絍，

紝，機縷也，糸に从ふ，壬の聲，絍，紝或いは絍に从ふ，

（校）「从絍」，大徐「从任」に作る。

70）十三篇上 (33b)。

71）十三篇上 (38a)。

72）大徐本では二十六字だが，段注本は，大徐本では「緝」篆の前にある「纑」と「絜」を「緝」「絣」二篆の間に移し，「緝」と「絣」の間に「緂」「績」「纑」「紨」「繕」「絺」「綌」「縐」「絟」「紵」「緦」「緆」「纑」「緰」「縗」「絰」「緶」「㡇」「紨」「緉」「絜」「繆」「綢」「絜」「縕」「紼」の順に二十六篆を列べるので，二十八字になる。

73）小雅・六月「織文鳥章」箋「織，徽織也」阮元校勘記「織，徽織也，小字本、相臺本同，閩本同，明監本、毛本徽作微，案徽字是也，釋文正義皆作徽，考左傳揚徽、禮記徽號鄭司常注及此箋皆用徽字者假借也，說文作微者正字也，明監本、毛本所改非是，正義中字同」釋文「織文，音志，又尺志反，注同」。七篇下 (49a) 巾部「微，微識也，旨絳帛，箸於背」段注に「若毛詩作織，則亦叚借字也」。

74）『漢書』地理志下「樂浪郡」下に「武帝元封三年開，莽曰樂鮮，屬幽州」。

75）『漢書』顔注に「韋昭曰，在板挈也，師古曰，著謂明書之也，挈，獄訟之要也，書於讞法挈令以為後式也，挈音口計反」。

76）酷吏傳・張湯。集解に「韋昭曰，在板絜」。「絜」は「麻一耑也」（十三篇上 37b 糸部）。

77）『漢書』燕王旦傳には見えず，燕王旦傳「將軍都郎羽林」注に「師古曰，都，大也，謂大會試之，漢光祿挈令，諸當試者，不會都所，免之」。

78）十二篇上 (26b) 手部「挈，縣持也」，段注に「古叚借爲契栔字，如爰挈我龜，傳云，挈，開也，又如紅字下云，樂浪挈令」。

79）四篇下 (52a) 㓞部。

80）三篇下 (9a) 鬲部「鬲」説解に「歷，漢令鬲，从瓦厤聲」，段注に「謂載於令甲、令乙之鬲字也，樂浪挈令，織作紅」。

（一）蠶は「絲」と曰ひ，麻は「縷」と曰ふ。「縷」なる者は「綫也」，「綫」なる者は「縷也」。[81]
喪服は縷若干升を言ひ，[82]『孟子』は「麻縷絲絮」を以て竝言す。[83]皆な麻を謂ふ也。然るに亦た麻、絲竝びに縷と言ふ者有り。「機縷」是れ也。「機縷」は今の機頭[84]。內則に曰く，「麻枲を執り絲繭を治め，紝を織り紃を組む」と。[85]「紝」は，麻枲、絲繭を合して之を言ふ。『左傳』に，魯楚に賂ひするに「執斲、執鍼、織紝，皆百人を以てす」と，杜曰く「織紝は繒布を織る者」と。[86]
（二）如甚の切，七部。按ずるに此の字 經典[87] 及び『玉篇』[88]『廣韵』[89] 皆な平聲。豈に『唐韵』に上聲の一切有らんや。抑そも二徐誤るのみ。

3b
綜，機縷也[一]，从糸宗聲[二]，
綜，機縷也，糸に从ふ，宗の聲，
（一）此れ亦た布帛を兼ねて之を言ふ也。玄應の書『說文』を引きて「機縷也，機縷の絲を持して交する者を謂ふ也」と[90]。下八字は蓋し庾儼默[91] の注。又た『三倉』を引きて「綜は經を理むる也，機縷の絲を持して交する者を謂ふ也，繩を屈し經を制して開合するを得しむる也」と[92]。按ずるに今尚ほ之を綜と謂ふ。引申の義は兼綜と爲し，錯綜と爲す。太玄經に曰く「乃ち名に綜ぶ」。[93]

81）いずれも十三篇上 (26a) 糸部。
82）『儀禮』喪服傳「冠六升」注に「布八十縷爲升」。傳に「緦六升」「大功布九升」「小功布十一升」など，また記に「衰三升，三升有半，其冠六升」「齊衰四升，其冠七升，以其冠為受，受冠八升」「繐衰四升有半，其冠八升，大功八升若九升，小功十升若十一升」などと見える。
83）滕文公上「麻縷絲絮輕重同，則賈相若」。
84）機の織り付け（織りはじめの部分）のことか。
85）釋文「織紝，女金反，又如林反」。
86）成公二年傳「楚侵及陽橋，孟孫請往賂之，以執斲、執鍼、織紝，皆百人」，釋文「織紝，女金反，徐而鴆反」，阮元校勘記に「釋文紝作絍，案說文云，紝或从任作絍」。
87）『禮記』『左傳』の釋文（注 85），注 86））參照。『左傳』釋文の徐の音は去聲。
88）糸部第四百二十五「絍，如林切，又女林切，機之縷也，紝，同上」。
89）下平二十一侵・任（如林切）小韻「紝，織紝，亦作絍」。しかし『左傳』釋文の徐の音と同音の去五十二沁・妊（汝鴆切）小韻にも「絍，織絍，亦作紝、絍」と見える。
90）卷 12 修行道地經第三卷「綜解」下。この條は高麗藏本には無い。卷 14 四分律第五十一卷「綜練」下も『說文』を引くが，「持」上に「機縷」二字が無い。
91）『隋書』經籍志一・經・小學「說文十五卷」下に「許慎撰，梁有演說文一卷，庾儼默注，亡」。
92）卷 2 大般涅槃經第十卷「綜習」下。卷 22 瑜伽師地論第四十一卷「綜集」下も『三蒼』を引くが，「經」下に「者」字が有り，「屈」字以下が無い。
93）玄首都序。今本（新編諸子集成『集注』本、新編諸子集成續編『校釋』本）は「于」を「乎」に作る。玄應音義卷 14 四分律第五十一卷「綜練」下に「太玄經云，乃綜於名，宋忠曰，所以紀綜之也」。段注はこれに據るか。但し，高麗藏本にはこの引用は無い。

（二）子宋の切，九部。

，緯十縷爲綹（一），从糸咎聲，讀若柳（二），

綹，緯十縷爲綹，糸に从ふ，咎の聲，讀みて桺(リウ)の若くす，

（一）此れ亦た布帛を兼ねて之を言ふ也。故に『篇』[94]、『韵』[95]に曰く「緯十絲を綹と曰ふ」と。文互ひに相ひ足す也。許「縷」を言ひて「絲」を言はざる者は，「縷」を言ひて以て「絲」を包ぬる可くして，「絲」を言ひて以て「縷」を包ぬる可からざれば也。

（二）力九の切，三部。

，織衡絲也（一），从糸韋聲（二），

緯，衡絲(よこいと)を織る也，糸に从ふ，韋の聲，

（校）「衡」，大徐「横」に作る。

（一）「衡」，各本「横」に作る。今正す。凡そ漢人の用字は皆な「從衡」に作る。許曰く，「横は闌足也」[96]と。「植」[97]なる者に對しては言はざる也。「衡絲を織る」と云ふ者は，上文の「從絲を織る」[98]に對して言を爲す。故に「絲」を言ひて以て縷を見す。經は軸に在り，緯は杼に在り。木部に曰く「杼は機の緯を持する者」[99]也と。引申して凡そ交會の稱と爲す。漢人 六經を左右するの書は之を「祕緯」と謂ふ。

（二）云貴の切，十五部。

，緯也（一），从糸軍聲（二），

緷，緯也，糸に从ふ，軍の聲，

（一）此れ亦た布帛を兼ねて之を言ふ也。「緯(イ)」亦た「緷(ウン)」と稱する者は語の轉也。微文二部毎に互ひに轉ず。『爾雅』に「百羽は之を緷と謂ふ」，「古本の反」と。[100]按ずるに此の「緷」字

94）『大廣益會玉篇』糸部第四百二十五「綹，力九切，緯十絲曰綹」。

95）『廣韻』上四十四有・柳（力久切）小韻に「綹，十絲爲綹」。「緯」字は無い。

96）六篇上 (60b) 木部「横」の説解は「闌木也」。段注に「闌，門遮也，引伸爲凡遮之偁，凡以木闌之皆謂之横也，古多以衡爲横，陳風傳曰，衡門，横木爲門也，考工記，衡四寸，注曰，衡古文横，假借字也」。「闌足也」は「桁」(54a) の説解。

97）六篇上 (35b) 木部「植，戸植也」段注に「徐鍇以爲横鍵，非也，按今豎直木而以鐵了鳥關之」。

98）十三篇上 (2b)「經」の説解。p.39 參照。

99）六篇上 (49a) 木部。段注本「之」字無し。各本「也」字無し。

100）釋器。釋文に「緷，古本反，又户本、苦本二反，埤蒼云，大束也」。

は正しく許書「橐」[101]字の叚借。『玉篇』に「緷は大束也」[102]と云ふは是れ也。

（二）王問の切，十三部。

4a

，織餘也［一］，一曰畫也［二］，从糸貴聲［三］，

繢，織餘也，一曰畫也，糸に从ふ，貴の聲，

（一）此れ亦た布帛を兼ねて之を言ふ也。上文「機縷」を機頭と爲し[103]，此の「織餘」を機尾と爲す。「繢」の言は遺也。故に訓じて「織餘」と爲す。「織餘」，今亦た呼びて機頭と爲す。用て物を系くるべく物を飾るに及ぶ。『急就篇』「絛」「繢」「總」を一類と爲す[104]は是れ也。顔、王[105]注未だ諦めず。今則ち此の義廢れり。

（二）四字『韵會』[106]に依りて補ふ。今傳はる所の小徐繫傳本，此の巻全て闕く。黄氏『韵會』を作る時見る所尚ほ完し。小徐本 此の四字有るを知る也。「畫」なる者は「介也」[107]。今之を「畍畫」と謂ふ。「繢（クワイ）」「畫（クワク）」は雙聲。考工記に曰く「設色の工は畫繢、鐘、筐、㡆」[108]，又た曰く「畫繢の事五采を襍（まじ）ふ」[109]と。咎繇謨「日、月、星辰、山、龍、華、蟲，繪を作す」。鄭注して曰く「繪は讀みて繢と曰ふ」と。[110]「讀みて曰ふ」は猶ほ「讀みて爲す」のごとし。其の字を易ふる也。

101）六篇下 (9a)「橐，橐也」段注に「廣韵曰，橐，大束」，また「胡本切，十三部」。

102）糸部第四百二十五。「古本切」。

103）「紝」の段注 (p.41) 參照。

104）第十五章「承塵户嫌絛繢總」顔注に「絛，一名偏諸，織絲縷為之，所以懸係承塵户嫌，因為飾也，繢亦絛組之屬也，似纂而色赤，總，以絲縷為之，所以束髪也，……」。

105）『經義述聞』巻 9 周官下・繢純に『急就篇』及び顔注を引き「蓋以此爲席縁也，古人謂赤爲繢，故爾雅赤莧謂之蕢，因聲託義也，……，但繢爲赤色之組……」。これを指すか。

106）去十一隊・潰（胡對切）小韻「繢，説文，織餘也，一曰畫也，从糸貴聲，或作繪，……」。

107）三篇下 (22b) 畫部「畫，」の説解。但し，二徐は「介」を「界」に作り，「界也，象田四界，聿，所以畫之」。段玉裁は「象」上に「從聿」二字を補い「四界」を「四介」に作り注して「介，各本作畍，此不識字義者所改，今正，八部曰，介，畫也，從八從人，人各有介」という。「界」（大徐は「畍」）（十三篇下 45a 田部）は「竟也」（二徐は「境也」），段注に「竟俗本作境，今正，樂曲盡爲竟，引申爲凡邊竟之偁，界之言介也，介者畫也，畫者介也，……，介界古今字」。

108）總序。

109）畫繢。

110）僞古文尚書では益稷。阮元本は「繪」を「會」に作る。僞孔傳に「會，五采也，以五采成此畫焉」，疏に「鄭玄云，會讀為繪」，釋文に「會，馬、鄭作繪，胡對反」。段注にいう鄭注は疏引く所だが，「繪讀曰繢」を「會讀為繪」に作る。『古文尚書撰異』巻 2 に「玉裁按此經本作繪，説文十三篇糸部繪字下引虞書山龍華蟲作繪，是其證也，鄭君謂繪之訓會五采繡也，畫繢字當依考工記從系貴聲，故注尙書云，繪讀曰繢，讀曰與讀為同，易其字也，繢之音胡對反，在十八隊，繪之音黄外反，在十四泰，此唐韵如是，本於陸法言切韵，故尙書釋文曰，繪，馬鄭作繢，胡對反，尙書正義曰，鄭云，繪讀為繢，凡畫者為繢，……，此可細推而得者也，孔本本作繪，故傳云，繪，會五采也，會五采三字即説文繪字下云會五采繡也，惟孔釋為畫事，　故去繡字耳，今本孔傳云會五采也，此不成文理，……」。

以て「畫」に訓ずるの字と爲し，當に「繢」に作るべき也。「繪」は「五采の繡」と訓ず。[111] 故に必ず「繪」を易へて「繢」と爲す。鄭司農『周禮』に注して『論語』「繢の事は素を後にす」を引く。[112]

（三）胡對の切，十五部。

，紀也 (一)，从糸充聲 (二)，

統，紀也，糸に从ふ，充の聲，

（一）『淮南』泰族訓に曰く「繭の性は絲を爲す。然れども女工を得て煮るに熱湯を以てし繭の性は絲を爲するに非ざれば，則ち絲を成す能はず」[113] と。按ずるに此れ其の本義也。引申して凡そ綱記の稱と爲す。『周易』「乃ち天を統ぶ」鄭注して云く「統は本也」と。[114]『公羊傳』「一統を大とすれば也」，何注して「統は始也」と。[115]

（二）他綜の切，九部。『玉篇』一音桶。[116]

，別絲也 (一)，从糸己聲 (二)，

紀，絲を別つ也，糸に从ふ，己の聲，

(校)「別絲」，大徐「絲別」に作る。

（一）「別絲」各本「絲別」に作る。棫樸正義引きて「紀は絲を別つ也」と。又た云く「紀なる者は絲縷を別理す」と。[117] 今依りて以て正す。「絲を別つ」なる者は，一絲必ず其の首有り，之を別つを是れ「紀」と爲す。衆絲皆な其の首を得るを是れ「統」と爲す。「統」は「紀」と義互ひに相ひ足す也。故に許は之を析言せず。禮器に曰く「衆の紀也，紀散ずれば衆亂る」，

111） 十三篇上 (13a) 糸部「繪，會五采繡也」段注に「會繪疊韵，今人分咎繇謨繪繡爲二事，古者二事不分，統謂之設色之工而巳，古者繢訓畫，繪訓繡」。

112） 畫繢「凡畫繢之事後素功」注に「鄭司農說以論語曰繢事後素」。阮元校勘記に「鄭司農說以論語曰，岳本、嘉靖本無曰，此衍」。阮元本『論語』八佾は「繢」を「繪」に作る。釋文「繪事，胡對反，本又作繢，同，畫文也」。阮元校勘記に「釋文出繪事云，……，案繪繢古通用，周禮考工記……注及文選夏侯常侍誄注竝引作繢」。潘岳「夏侯常侍誄」は『文選』巻 57。「如彼錦繢，列素黜絢」李善注。

113） 今本（新編諸子集成『鴻烈集解』本、『集釋』本）は「女工」を「工女」に作る。

114） 乾・彖傳。釋文に「乃統，鄭云，統，本也」。

115） 隱公元年傳「何言乎王正月，大一統也」注「統者始也，揔繫之辭」。

116） 糸部第四百二十五に「統，他綜切，又音桶，緫也」。他綜切は宋韻，音桶は董韻。

117） 大雅。「勉勉我王，綱紀四方」箋「我王謂文王也，以罔罟喻為政，張之為綱，理之為紀」の疏に「說文云，綱，綱紘也，紀，別絲也，然則綱者網之大繩，故盤庚云，若網在綱，有條而不紊，是其事也，以舉綱能張網之目，故張之為綱也，紀者別理絲縷，故理之為人，以喻為政有舉大綱赦小過者，有理微細窮根源者」。上海古籍「世紀出版」本『毛詩注疏』は「理之為人」の「人」を「紀」に作る。校勘記に「故理之為紀，『紀』原作『人』，阮本同。據単疏本、毛本改」。

注に曰く，「紀」なる者は「絲縷の數に紀有る」也[118]と。此れ「紀」の本義也。之を引申して凡そ經理の稱と爲す。『詩』「四方を網紀す」，箋に云く「罔罟を以て政を爲すに喩ふ，之を張るを綱と爲し，之を理むるを紀と爲す」と。[119]洪範 九疇に「四，五紀」と。[120]斗、牽牛を星紀と爲す。[121]『史記』帝毎に本紀と爲すは，其の事に本づきて分別し之を紀むるを謂ふ也。『詩』「滔滔たる江漢，南國の紀」，毛傳に曰く「其の神以て一方に綱紀たるに足る」，箋に云く「南國の大川 衆水を紀理し壅滯せざらしむ」と。[122]

（二）居擬の切，一部。

4b

，觵類也（一），从糸強聲（二），

繈，觵なる類也，糸に从ふ，強の聲，

（校）「觵」，大徐「牨」に作る。

（一）「觵」は角部に見ゆ。[123]各本「牨」に作るは非也。今正す。「觵」は「角長」と訓じ，引申して凡そ粗長の稱と爲す。絲の節粗（ふと）く長きは之を繈と謂ふ。孟康「繈は錢貫也」と曰ふ[124]は，其の引申の義也。又た引申して繈緥と爲す。『呂覽』明理篇に「道に繈緥多し」，高注して「緥は小兒の被也，繈は褸格上の繩也」と。[125]又た直諫篇「繈緥」注に「繈は褸格の繩，緥は小兒の襘也」[126]「褸」は卽ち「縷」，「格」は卽ち「絡」，縷を織りて絡を爲り，以て之を背に負ふ。其の繩は之を繈と謂ふ。高說取も分明なり。『博物志』に云ふ，「縷を織りて之を爲る，廣さ八寸，長さ二尺」と。[127]乃ち其の絡を謂ひ未だ其の繩に及ばざる也。凡そ繩の韌（やはら）かなる者は之を繈と謂ふ。

118）阮元本は注に「者」字「也」字は無い。

119）注 117) 參照。

120）『尚書』洪範。五紀とは「一曰歲，二曰月，三曰日，四曰星辰，五曰厤數」。

121）『爾雅』釋天「星紀，斗、牽牛也」注「牽牛斗者，日月五星之所終始，故謂之星紀」。

122）小雅・四月。阮元本は「川」を「水」，「水」を「川」に作る。

123）四篇下 (56a)「觵，角長皃」段注に「按此字見於經史者，皆譌爲牨，從牛角」。

124）『漢書』食貨志下「臧繈千萬」顏注引く。

125）季夏紀。今諸本「繈緥」を「褓繈」に作る。諸子集成本、『校釋』本は高注「格」下に「上」字無し。畢沅校語に「舊本，格作袷，又作拾，下又衍一上字，皆訛」。

126）貴直論。諸子集成本、『校釋』本，注「褸」字を「縷」，「襘」字を「被」に作る。畢沅校語に「舊本，縷訛楼，被訛補，案明理篇注云，……，此少上字，縷字、被字據改正」。段注の「襘」字は何に據るか不明。

127）今本『博物志』には見えない。『論語』子路「夫如是，則四方之民襁負其子而至矣」集解「負者以器曰襁」（校勘記「皇本襁下有也字，案史記弟子傳集解引包注作負子之器曰襁」），釋文に「繈，居丈反，又作襁，同，博物志云，織縷為之，廣八寸，長丈二，以約小兒於背」，疏に「博物志云，織縷之，廣八尺，長丈二，以約小兒於背」（校勘記「北監本、毛本之上有為字，案釋文繈下引博物志亦有為字」。釋文、疏ともに『博物志』を引くが，段注の引用とテキストの異同がある。

（二）居网の切，十部。

，絲節也（一），从糸頪聲（二），

纇，絲の節也，糸に从ふ，頪の聲，

（一）「節」なる者は「竹の約也」[128]。　引申して凡そ約結の稱と爲す。絲の約結して解けざる者を「纇」と曰ふ。之を引申して凡そ人の愆尤は皆な「纇」と曰ふ。『左傳』「忿纇にして期無し」[129]，是れ也。亦た「類」を叚りて之と爲す。昭十六年傳に曰く「刑の頗類なる」，服虔「類」を讀みて「纇」と爲し，解に「纇は平ならざる也」と云ふ。[130]

（二）盧對の切，十五部。

5a

，絲勞即紿（一），从絲台聲（二），

紿，絲勞すれば即ち紿なり，糸に从ふ，台の聲，

（一）「即」當に「則」に爲るべし。古書「即」「則」多く互ひに譌る。絲勞敝すれば則ち紿と爲る。「紿」の言は怠也。人の券怠するが如く然り。古へ多く叚りて詒字と為す。言部に曰く「詒」なる者は「相ひ欺詒する也」[131]と。

（二）徒亥の切，一部。

，絲溼納納也（一），从糸內聲（二），

納，絲溼れば納納たる也，糸に从ふ，內の聲，

（一）「納納」は溼る意。劉向 九歎「衣納納として露を掩ふ」，王逸注して「納納は濡溼する貌」と。[132]『漢』酷吏傳「人主に阿邑す」蘇林曰く「邑，音人相悒納の悒」と。[133]按ずるに「悒納」當に「浥納」に作るべし。[134]媕阿[135]の狀。「濡溼」に義近き也。古へ多く「納」を叚りて內字と爲す。[136]

128）五篇上 (2b) 竹部「節」の説解。
129）昭公二十八年傳。注「纇，戾也」，釋文「忿纇，本又作類，力對反，戾也，服作類」。
130）注「緣事類以成偏頗」，釋文「類，如字，事類也，一音力對反，注同，徐又力猥反」，疏「服虔讀類為纇，解云，頗，偏也，纇，不平也」。阮元校勘記に「顧炎武云，類當作纇，案正義引服虔……　，是經假類為纇也」
131）三篇上 (21a)「詒」説解。段注に「史漢多假紿爲之」。
132）逢紛。
133）贊。「張湯以知阿邑人主，與俱上下」顔注は蘇林説を引いて「如蘇氏之説，邑字音烏合反，然今之書本或作色字，以言阿諛，觀人主顔色而上下也，其義兩通」。
134）十篇下 (37b) 心部「悒，不安也」，十一篇上二 (13b) 水部「浥，溼也」。
135）『廣韻』下平二十二覃・諳（烏含切）小韻「媕，媕娿，不決」。
136）『周易』蒙「九二，……，納婦吉」，『尚書』金縢「乃納冊于金縢之匱中」，『儀禮士昏禮「納采」など，經傳をはじめ數限りない。

「內」なる者は「入也」[137]。
（二）奴荅の切，古音は亦た十五部に在り。[138]

，紡絲也（一），从糸方聲（二），
紡，絲を紡ぐ也，糸に从ふ，方の聲，
（校）「紡」，大徐「網」に作る。
（一）「紡」各本「網」に作る。通ず可からず。唐本「拗」に作る[139]は，尤も誤れり。今定めて「紡絲也」三字句と爲す。[140]乃ち今人の常語のみ。凡そ他字を以て訓と爲すを必せざる者は其の例此くの如し。絲の紡は猶ほ布縷の績緝のごとき也。『左傳』に，莒の婦人「紡ぎて以て度りて之を去む」と。[141]蓋し布縷を緝ぎて繩を爲すも亦た「紡」の名を用ふる也。晉語「執へて廷の槐に紡る」[142]，亦た縷を紡ぐ繩を以て之を縛るを謂ふ也。聘禮「賓裼して迎ふ，大夫賄るに束紡を用てす」，鄭曰く「紡は絲を紡ぎて之を爲す，今の縛也」と。[143]「縛」は下文に見ゆ。「白き鮮支也」。[144]此に據れば，是れ「絲を紡ぐ」は專ら「絹を作る」に用ふる也。
（二）妃网の切，十部。

，斷絲也（一），从刀糸（二），卪聲（三）， ，古文絕，象不連體絕二絲（四），
絕，絲を斷つ也，刀糸に从ふ，卪の聲，𢇍，古文の絕，二絲を連體せず絕つに象る，
（校）「从刀糸卪聲」，大徐「从糸从刀从卪」に作る。
（一）之を斷てば則ち二と爲る，是れを絶と曰ふ。之を引申して凡そ之を横越するを絶と曰ふ。

137）五篇下 (18a) 入部「内」の説解。段注に「今人謂所入之処爲內，乃以其引伸之義爲本義也，互易之，故分別讀奴荅切，又多假納爲之矣」「奴對切，十五部」。

138）今韵古分十七部表では奴荅切（合韻）は八部。古十七部諧聲表では内聲は十五部。

139）『六書故』卷 30 工事六「甫罔切，……，傳曰紡焉以度而去之，以紡絲為繒者，因謂之紡，聘禮曰，賄用束紡（康成曰，紡，紡絲所為，今之縛也，説文曰，网絲也，蜀本作拗絲，按為网者必紡其絲，故許氏云），因為纆縛之義，晉語曰，執而縛於廷之槐」「唐本」は「蜀本」の誤りか。

140）『大廣益會玉篇』糸部第四百二十五「紡，孚往切，紡絲也」。

141）昭公十九年傳「初莒有婦人，莒子殺其夫，已為嫠婦，及老託於紀鄣，紡焉以度而去之」注「因紡纑，連所紡，以度城而藏之」。

142）晉語九。韋注「紡，縣也」。今本「廷」を「庭」に作る。段玉裁は『六書故』引く所に據るか。注139）參照。

143）釋文「之縛，劉音須，一本作縛，息絹反，案説文白鮮色也，居掾反，聲類以為今正絹字」，釋文は「縛」を「縛」に作る。阮元校勘記に「戴震曰，周禮內司服注，素沙者今之白縛也，釋文劉音絹，聲類以為今作絹字，此獨作縛，縛乃繻之俗體，繻因有須音，然與周禮音義剌謬以聲類證之，音絹是也，須乃絹之訛，以周禮證之，作縛是也，釋文訛而為縛」。詳しくは「縛」字段注參照。

144）十三篇上 (11a) 糸部「縛，白鮮卮也」。但し，大徐本は「卮」を「色」に作る。段注に「卮各本作色，今正，下文云，縞，鮮卮也，今本譌鮮色，則此色誤亦同，卮與支音同，縞爲鮮支，縛爲鮮支之白者」。

「河を絶（こ）えて渡る」の如きは是れ也。又た絶すれば則ち窮す。故に引申して極と爲す。「絶美」、「絶妙」と言ふが如きは是れ也。許書𨸏部に云く「陘は山の絶坎也」と。[145]是れ中斷の義也。水部に曰く「滎は絶（きは）めて小なる水也」と。[146]是れ極至の義也。閻氏百詩乃ち絕河を以て「滎」を釋し以て禹貢を釋す。[147]禹貢「熒澤」[148]古へ自り三火に从ふの「熒」に作るを知らず。後人乃ち譌りて「滎」に爲る。[149]

（二）絲を斷つに刀を以てする也。會意。

（三）以上五字今定む。情雪の切，十五部。

（四）象形也。

5b

，續也（一），从糸㡭（二）， ，𢇍或作𢇍，反㡭爲𢇍（三），

⿰糸㡭，續也，糸㡭に从ふ，𢇍，⿰糸㡭或いは𢇍に作る，㡭を反して𢇍と爲す，

（校）「⿰糸㡭」，大徐「繼」に作る。「糸㡭」，大徐「糸𢇍」に作る。「𢇍⿰糸㡭或作𢇍」，大徐「一曰」に作る。「爲𢇍」，大徐「爲繼」に作る。

（一）虞翻『易』に注して曰く「繼は統也」と。[150]

（二）各本篆文「繼」に作り，解「从糸𢇍」に作るは，則ち通ず可からず，今正す。此れ會意字。「糸㡭に从ふ」なる者は糸を以て其の絶ゆるを聯ぬるを謂ふ也。傳寫譌亂する自り篆體を併せて之を改め，因りて又た「𢇍」篆を刪る。古詣の切，十五部。

（三）大徐篆文無し。但だ「一に曰く，㡭を反して𢇍と爲す」六字有り。了ふる可からず。小徐本に云く「或いは𢇍に作る，㡭を反して𢇍と爲す」と。[151]今依りて以て一篆文を補ふ。乃

145）十四篇下 (7a)。

146）大徐本十一篇上に「濘，滎濘也」「滎，絶小水也」，段注本（十一篇上二 (16a)）は「滎」篆と「濘」篆の順序を入れ換え，「滎」の説解の「絶」字の上に「滎濘」二字を補う。「滎」段注に「中斷曰絶，絶者窮也，引伸爲極至之用，絶小水者極小水也，此六書不可以本義滅其引伸之義者也，許書陘者山絶坎也，此中絶之絶，絶小水非其倫也，然則熒澤字從火之義若何，曰，泲之顯伏不測，如火之熒熒不定也」。

147）閻若璩『潛邱劄記』（皇清經解本巻 25 に據る）は，『新唐書』巻 223 姦臣上の許敬宗傳に見える許敬宗の高宗との『尚書』禹貢「浮于濟、漯」についての問答を取り上げて，「熒」を「滎」に作り，「滎」の『説文』「絶小水也」の意味を問う胡朏明の問に對し，『爾雅』釋水「正絕流曰亂」を引き「孫炎所謂横渡是也，濟水截河南過爲滎，故以絶字解滎，……」という。

148）「滎波既豬」，また「入于河溢為滎」僞孔傳に「滎澤」。阮元本『尚書』はすべて「滎」に作る。

149）十篇下 (1b) 焱部「熒，屋下鐙燭之光也」段注は「熒澤」、「熒陽」について『左傳』、『毛詩』鄭箋、『玉篇』、漢碑などを引き「然則熒澤、熒陽古無作滎者，尙書禹貢釋文經宋開寶中妄改熒爲滎，而經典、史記、漢書、水經注皆爲淺人任意竄易，以爲水名當作滎，不知泲水名熒，自有本義，於絶小水之義無涉也」。

150）繫辭傳上「繼之者善也」集解引く。

151）祁刻本は大徐本に同じ。段注下文及び注 154) 參照。

ち文をして字に従ひて順たらしむ。之を反(かへ)して字を成す者，巳を反して「㠯」と為し[152]，「人」を反して「匕」と爲し[153]，「正」を反して「乏」と爲す[154]が如きは是れ也。小徐本は『韵會』[155]に見ゆ。『莊』[156]、『列』[157]皆な「水を得るを𢇍と爲す」と云ふ。此の篆の古書に見ゆる者は惟だ此れのみ，而して『莊』譌りて「㡭」に作る。[158]

續，連也(一)，从糸賣聲(二)，賡，古文續，从庚貝(三)，

續，連也，糸に从ふ，賣の聲，賡，古文の續，庚貝に从ふ，

(一)「連」なる者は「負車也」[159]，「聯」なる者は「連也」[160]。皆な其の義也。釋詁に曰く「繼也」と。[161]

(二) 似足の切，三部。

(三) 咎繇謨「乃ち賡いで歌を載す」，釋文に「加孟」、「皆行」二反。[162]賈氏昌朝云く「唐韵以て說文の誤りと爲す」と。[163]徐鉉曰く「今俗に古行の切に作る」と。按ずるに『說文』誤りに非ざる也。許は會意字と謂(おも)ふ。故に「庚」「貝」に从ひて會意す。「庚貝」なる者は貝更迭し相ひ聯屬する也。『唐韵』以下皆な形聲字と謂ふ。「貝」に从ひ「庚」の聲，故に當に「皆行の反」たるべき也。此字果して「貝」に从ひ「庚」の聲なるかを知らず。許必ず之を貝部或いは庚部に入る。其の誤りは孔傳に起る。「續」を以て「賡」を釋す。故に遂に許說を用ひず。抑そも今字を以て古文を釋すを知る。古人自ら此の例有り。卽ち許「舄は誰也」と云ふ[164]が如し。

---

152) 十四篇下 (31a) 巳部「㠯，用也，从反巳，……」。

153) 八篇上 (40b)「匕，相與比敘也，从反人，匕亦所㠯用比取飯，一名柶」。

154) 二篇下 (1a)「乏，春秋傳曰，反正爲乏」。

155)『古今韻會舉要』去八霽・計（吉詣切）小韻に「繼，說文續也，从糸𢇍聲，或作𢇍，反㡭為𢇍，㡭，古絶字，……」。

156) 至樂篇。原文は「水」下に「則」字有り。釋文に「得水則為𢇍，此古絶字，徐音絶，今讀音繼，司馬本作繼，云，萬物雖有兆朕得水土氣乃相繼而生也，本或作斷，又作續斷」。盧文弨校「古絶字當作㡭，此𢇍字乃繼字」。

157) 天瑞篇。

158) 今本いずれも「𢇍」に作る。釋文同じ。『段注攷正』は釋文が「此古絶字，徐音絶」とすることに據り「譌作㡭」というのだろうとする。

159) 二篇下 (9a) 辵部。但し二徐は「員連也」。段注に「連卽古文輦也，……，負車者，人輓車而行，車在後如負也，字从辵車會意，猶輦从㚘車會意也，人與車相屬不絕，故引伸爲連屬字」。

160) 十二篇上 (16b) 耳部。段注に「連者負車也，負車者，以人輓車，人與車相屬，因以爲凡相連屬之偁」。

161) 釋詁上「紹、胤、嗣、續、纂、緌、績、武、係，繼也」。

162) 僞古文尚書では益稷。僞孔傳「賡，續，載，成也」釋文「賡，加孟反，劉皆行反，說文以為古續字」。

163)『羣經音辨』卷 7 辨字訓得失・賡「說文以為古續字，……，按唐韻以為說文之誤，臣謂非說文誤，蓋傳者失之，說文必本六書為音，此二字之音皆於六體不協，疑說文續字其下必有賡載之說，傳者因復出賡云，或从庚貝，……，尚書釋文賡有加孟皆行二切，曰，說文以為古續字，徐鉉修說文曰，今俗作古行切，陸不出續音，而徐增古行切，皆有意焉」。

164) 四篇上 (56b) 烏部。段注に「謂舄卽誰字，此以今字釋古字之例，古文作舄，小篆作誰」。

今字を以て古文を釋すに非ざるか。『毛詩』「西に長庚有り」，傳に曰く「庚は續也」。[165]此れ正しく「庚」は「賡」と義を同じうし「庚」に「續」義有るを謂ふ，故に古文の續字取りて以て會意する也。會意を仞りて形聲と爲す。其の晉亂此くの如き者有り。

6a

，繼也（一），从糸贊聲（二），

纘，繼也，糸に从ふ，贊の聲，

（校）「繼」，大徐「繼」に作る。

（一）豳風「載ち武功を纘ぐ」，傳に曰く「纘は繼」也と。[166]中庸「武王は大王、王季、文王の緒を纘ぐ」，注に曰く「纘は繼也」と。[167]或いは「纂」を叚りて之と爲す。[168]

（二）作管の切，十四部。

，繼也（一），从糸召聲（二），一曰，紹，緊糾也（三）， ，古文紹，从卪（四），

紹，繼也，糸に从ふ，召の聲，一に曰く，紹，緊（かた）き糾也，綤，古文の紹，卪に从ふ，

（校）「繼」，大徐「繼」に作る。「 」，大徐「 」に作る。「从卪」，大徐「从邵」に作る。

（一）釋詁に同じ。[169]

（二）市沼の切，二部。

（三）「緊」なる者は「絲を纏（くく）ること急也」[170]。「糾」なる者は「三合」の「繩也」[171]。

（四）今本譌れり。『玉篇』[172]、『廣韵』[173]、『汗簡』[174]に依りて改正す。

，偏緩也（一），从糸羨聲（二），

165）小雅・大東。

166）七月。釋文「載纘，子管反，繼也」。

167）釋文「纘，徐音纂，哉管反，繼也」。

168）注 161) 引く釋詁上の「繼也」と訓じられる「纂」について『義疏』は「纂者纘之叚音也」とし，例として『禮記』祭統「纂乃祖服」（鄭注「纂，繼也」），『國語』周語上「纂修其緒」（韋注「纂，繼也」）を擧げる。

169）注 161) 參照。

170）三篇下 (23b) 臤部「緊」の説解。

171）三篇上 (5a) 丩部「糾」の説解は「繩三合也」。

172）糸部第四百二十五「紹，市沼切，繼也，急糾也，綤，古文」。『大廣益會玉篇』は古文を「邵」に从う「綤」に作る。

173）上三十小・紹（市沼切）小韻「紹，繼也，亦姓，……，綤，古文」。澤存堂本などは『玉篇』と同じく，古文を「邵」に从う「綤」に作る。周祖謨校勘記は「綤」を「卲」に从ふ「綤」に改める。

174）下之一に「 ，紹並説文」。楷書化すれば「糸」と「卲」に从ふ「綤」か。

繟，偏りて緩き也，糸に从ふ，羨の聲，

（一）「緩」，正しくは「䌫」に作る。「䌫也」。[175]『毛詩』「檀車幝幝たり」，毛曰く「幝幝は敝るる皃」，釋文に云く「韓詩 繟繟に作る」と。[176]蓋し物敝るれば則ち緩し。其の義相ひ通ず。

（二）昌善の切，十四部。

6b

，緩也（一），从糸盈聲，讀與聽同（二）， ，縕或从呈，

縕，緩き也，糸に从ふ，盈の聲，讀みて聽と同じ，緹，縕或いは呈に从ふ，

（一）「縕」の言は挺也。「挺」[177]，緩の意有り。「縕」は「綎」[178]と義別なり。『韵會』誤りて合して一字と爲す。[179]

（二）他丁の切，十一部。

，緩也，一曰捨也（一），从糸從聲（二），

縱，緩き也，一に曰く，捨つる也，糸に从ふ，從の聲，

（校）

（一）各本「舍也」に作る。俗に「舍」[180]「捨」を以て通用するに由る也。今正す。「捨」なる者は「釋く也」。[181]

（二）足用の切，九部。後人以て從衡の字と爲す者は非也。[182]

，緩也（一），从糸予聲（二），

175）十三篇上 (39b) 素部「𦃟（䌫），䌫也，从素爰聲，緩，𦃟或省」。

176）小雅・杕杜。釋文「幝幝，尺善反，又勑丹反，敝貌，說文云，車敝也，從巾單，韓詩作繟，音同」。釋文は「繟」字を重ねない。

177）十二篇上 (44b) 手部「挺，拔也」段注「左傳，周道挺挺，直也，月令，挺重囚，寛也，皆引申之義」。「寛」は「緩」の意に通じるか。

178）十三篇上 (23a) 糸部「綎，系綬也」。段注に「系當作絲，廣韵曰，絲綬，帶綎，玉篇曰，絲綎，綬也，按此綬蓋綬之類而已，非印綬之綬」。

179）平九青・聽（湯丁切）小韻「綎，說文系綬也，从糸廷聲，廣韻，絲綬，帶綎，或作縕，說文緩也，……」。

180）五篇下 (16a) 亼部「舍，市居曰舍」。段注に「舍可止，引伸之爲凡止之偁，釋詁曰，廢稅赦舍也，凡止於是曰舍，止而不爲亦曰舍，其義異而同也，猶置之而不用曰廢，置而用之亦曰廢也，論語，不舍晝夜，謂不放過晝夜也，不放過晝夜，卽是不停止於某一晝一夜，以今俗音讀之，上去無二理也，古音不分上去，舍捨二字義相同」。「緩」字注の說と異なる。

181）十二篇上 (29b) 手部「捨」說解。段注に「釋者解也，按經傳多叚舍爲之」。

182）八篇上 (43a) 从部「從，隨行也」段注に「伸爲主從，爲從横，爲操從，亦假縱爲之」。

紓，緩き也，糸に从ふ，予の聲，

（一）小雅「彼の交り紓に匪らず」傳に曰く「紓は緩也」と。[183]『左傳』多く「紓」字を用ふ。[184]其の義皆な同じ。亦た「抒」[185]を叚りて之と爲す。

（二）傷魚の切，五部。

本稿は JSPS 科研費 JP18K00349 の助成を受けたものである。

183） 小雅・采菽。釋文「匪紓，音舒，紓，緩也」

184） 阮元本の諸經・『春秋』傳に見える「紓」は采菽を除く 14 例はすべて『左傳』。莊公三十年傳「以紓楚國之難」（注「紓，緩也」釋文「以紓，音舒，一音直汝反，緩也」），僖公二十一年傳「是崇皞濟而脩祀紓禍也」（注「紓, 解也」釋文「紓禍, 音舒, 解也」）, 僖公三十三年傳「遲速唯命, 不然紓我」（注「紓，緩也」釋文「紓我，音舒，緩也，一音直呂反」），同「悔敗何及，不如紓之，乃退舍」，文公十六年傳「姑紓死焉」（注「紓，緩也」釋文「姑紓，音舒，緩也」），成公二年傳「我亦得地而紓於難」（注「齊服則難緩」釋文「而紓，音舒，緩也，一音直呂反」），成公三年傳「而求紓其民」（注「紓，緩也」釋文「求紓，音舒，緩也」），成公九年傳「而紓晉使」（注「紓，緩也」釋文「而紓，音舒」），成公十六年傳「可以紓憂」（注「紓，緩也」釋文「以紓，音舒，緩也」），襄公八年傳「姑從楚以紓吾民」（釋文「以紓，音舒」），襄公二十九年傳「必三年而後能紓」（注「紓，解也」釋文「能紓，直呂反，徐音舒，解也」「紓解，音蟹」），昭公三十二年傳「從王命以紓諸侯」（釋文「以紓, 音舒」) 定公十年傳「而得紓焉」（釋文「得紓, 音舒」），定公十四年傳「以紓余死」（釋文「以紓，音舒」）。

185） 十二上 (42b) 手部「抒，挹也」段注に「左傳，難必抒矣，此叚抒爲紓，紓者緩也，服虔本正作紓」。段注引く『左傳』は文公六年「難必抒矣」（阮元校勘記「葉抄釋文抒作杼，正義引服虔本作紓字，按說文紓緩也，紓為正字，抒為假借字」）注「抒，除也」釋文「必抒，直呂反，又時呂反，除也」疏に「抒，聲近除，故為除也，服虔作紓，紓，緩也」（阮元校勘記「閩本、監本、毛本紓作舒」）。